

離郷門信徒アンケートの報告 ①

「離郷門信徒のつどい」の可能性

浄土真宗本願寺派総合研究所 藤丸 智 雄
横井 桃子

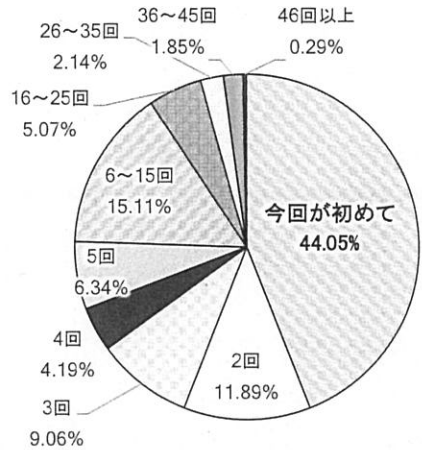


図1 これまでの参加回数 (N=1026)

●参加回数について—5回以上の参加の方も多い—
これまでに参加した回数をたずねると、図1のようになった。「つどい」の開催が近年広がりつつあり、新しく開催し始めた主催団体も多い(2015年度開催53件中、新規開催団体が15件)ためだろう、参加回数が1度という回答が半数近くを占めた。一方で、5回以上参加しているという回答も30・8%にのぼっており、継続的に参加している方の多さも確認できる。

葬儀に関すること

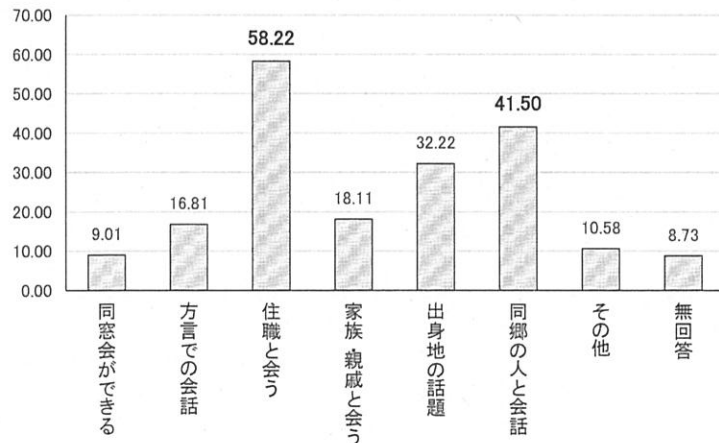


図2 楽しみにしていること (複数回答, N=1077)

●住職に会い、法要に参加する楽しさ
「つどい」開催にあたって、主催団体側にはやはり「多くの方々に参加いただきたい」「来ていただいた方に満足していただきたい」という思いがある。そのためには、参加者のニーズを確かめることが大切である。そこで、「つどい」で

楽しみにしていることをたずねる質問が設けられた。

分析したところ、図2の結果が得られた。同郷の人と会話ることや出身地のことを話せるといった「故郷」に関する回答も多いが、最も数値が高かったのは「住職と会う」であった。また、「その他」に付した自由記述欄には、「法話を聞くのが楽しみ」「法事ができる喜び」などと多数書き込まれており、「つどい」で住職に会い、法要に参加し法話を聞くということが、「つどい」の重要な要素であることが確認できる。

●所属寺に行ったことがない「つどい」への参加者

図3は、「所属寺への参拝頻度」の結果である。「1年に1回」という回答がもっとも多い。一方で、7・66%の方が「年に10回以上」と毎月のように参拝しており、参拝頻度は「1年に1回」を中心にほぼ左右対称の山型になっている。さて、興味深いのは約9%の方が「行ったことがない」と答えていることだ。

●「離郷門信徒のつどい」アンケートについて

宗門では、寺院活動支援部の支援のもと、「離郷門信徒のつどい」(以下、「つどい」)を各地で開催している。従来、「お寺」の近くに定着していた門信徒が他の地域へと移動する流れが進行しており、そうした方々と「お寺」の関係は希薄化し、また家族形態の変化に伴い「家のなかで育まれた伝承」は崩れつつある。こうした中、地方から離れていった方々を対象に、寺院や組などを単位として、都市部における「つどい」を開催し、浄土真宗との繋がりを強めようと試みられている。

従来、この活動の成果について、十分な検証がなされてこなかった。そこで、2015年4月から2016年3月までの1年間に開催された「つどい」において、アンケート調査を行った。アンケートは参加者と主催者、それぞれに対して行ったが、今回は、参加者に対して行ったアンケートの結果について、横井桃子(浄土真宗本願寺派総合研究所研究助手)

の分析に基づき、分析結果の一部について報告を行う。

(報告の全体は寺院活動支援部へ提出するとともに、それをうけて中央寺院振興対策委員会において、2016年2月・9月の2度にわたり報告を行った)

●調査の概要

調査期間…2015年4月～2016年3月末

調査主体…寺院活動支援部

調査対象者…上記期間内に実施された「離郷門信徒のつどい」45

団体の参加者1129名

調査方法…アンケート票の一斉配布による質問紙調査

調査内容…社会的属性(年齢、性別)、同行者、会場までの所要時間、参加回数、つどいで楽しみにしていること、つどいに期待すること、所属寺に関すること、仏壇に関すること、墓に関すること、

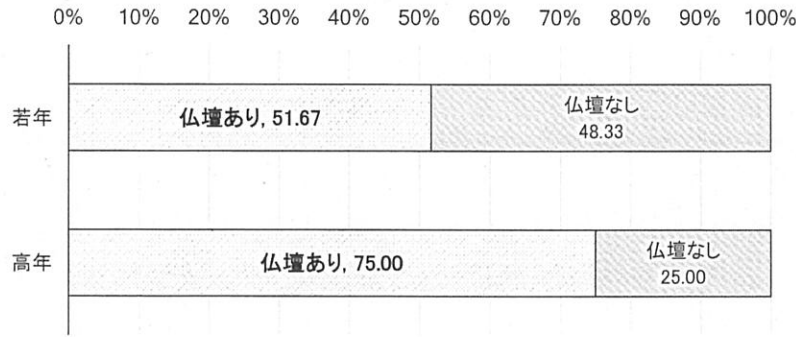


図5 仏壇の有無 (若年N=209, 高年N=688)

層のおよそ半分が、「仏壇なし」と答えている。「つどい」に参加するようないくつかの理由が想定される。一定程度、お寺との繋がりが想定される家庭においても、日常の中から仏事が消滅しようとしている。こうした状況への対策は急務であろう。

●「つどい」を継続して欲しい
今回のアンケートでは、「つどい」に期待することをたずねた。選択肢は、「継続」「多くの人の参加」「子や孫の参加」「若い人の参加」「その他」の5つ。この中で、約70%という高い数値を示したのは、「継続」であった。継続して開催して欲しいということを示す高い数値から、「つどい」がおおむね好評であることが分かる。

一方で、「つどい」は「子どもたちへ、お念仏の声をとどけるために」と、理念を掲げ、お寺との繋がりを「細い糸をたぐり、より合わせてもつと太い糸や綱にして」いくことを目的としているのである。右記の結果だけで「つどい」の成果を謳うことはできない。

この目的に合致した活動としていくためには、「つどい」が次世代への繋がりを生む場になる必要がある。そのためには、「つどい」をどのような場とすべきなのか？ また「つどい」という形態が、本当に効果的な方法なのか？ さらに

※本稿で掲載した図表について、Nは回答者数を表す。
※「つどい」でアンケートにご協力いただいた方々に、心よりお礼申し上げます。
※本稿で紹介した内容は、横井による分析結果（「報告書」）のごく一部です。報告書では、すべての設問の結果について詳細な分析を行うとともに、回答者を若年・高年に分けて分析を深めています。「報告書」全体については、浄土真宗本願寺派総合研究所までお問い合わせ下さい。

さらに、若年層（59歳以下）に限定すると、約15%が所属寺への参拝経験を持たない。実数で言えば、回答者177人の

「つどい」については、「転出した第2世代になるとお寺との繋がりは期待できない」「故郷にいる時にお寺に繋がっていない方々は来ない」という課題が、しばしば指摘される。しかし、実際には1割近くの方が、お寺に来たことがないのに「つどい」に参加している。「つどい」が、新たな繋がりを作り出すきっかけになっている面があると言える。

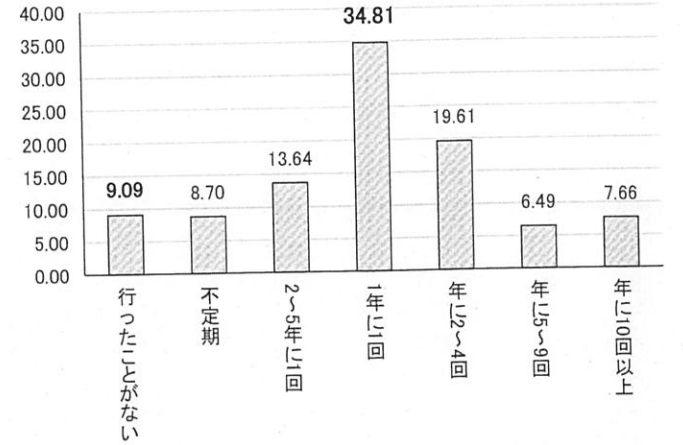


図3 所属寺への参拝頻度 (N=770)

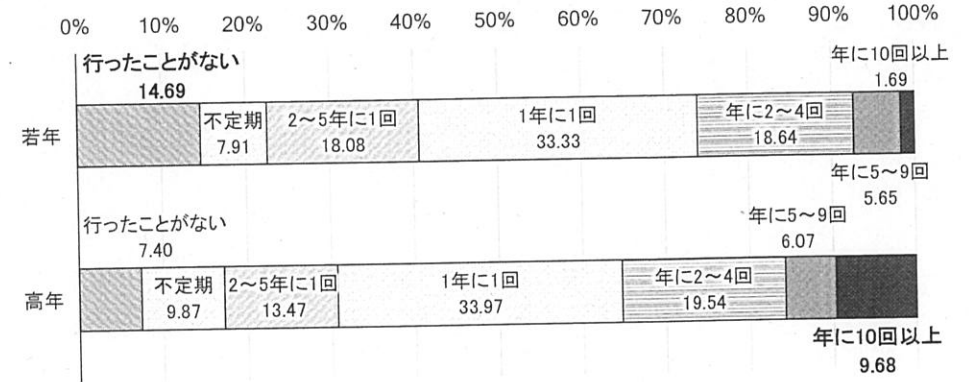


図4 所属寺への参拝頻度 (若年N=177, 高年N=527)

内、26人が参拝したことがないと答えたことになる。この数字から、お寺との関係が薄い方へのご縁づくりという面で、一定の成果を見ることができるとは、これが本場にご縁になりうるのかという点については、「継続的にお寺に参与していくか」「どのようなご縁となりうるか」について、また参拝したことがない方々が、どのようなきっかけ、目的で参加したのかについてなど、今後の調査で確認していく必要があるだろう。

●「仏壇あり」が50%

「つどい」のアンケートからは、都市部へ出た方々の宗教事情もうかがい知ることが出来る。その一つが、「仏壇の有無」についての設問である。

各種調査において都市部で仏壇を有する家庭が約40~50%と言われる中で、「つどい」の参加者においては70・3%が保有しているという高い数値となった。しかし、これを若年層（59歳以下）と高年層（60歳以上）に分けると、若年

に開催を継続していくには、主催者側に大きな負担が付きまとう。そのため、継続して開催することは、必ずしも容易でない。そうした問題を、どのようにクリアしていくのか。

こうした課題については、引き続き、次回の主催者側アンケートの報告において検証していきたい。

War (日本語訳『禅と戦争——禅仏教は戦争に協力したか』二〇〇一年) という本を出版して大変話題になりました。その頃アメリカでは、キリスト教などにはない身体性をともなう座禅が人気を集め、仏教=Zen (禅) と考えられるほどに Zen ブームが沸き起こっていました。そのようなか、Zen が実は先の戦争に協力していたことが本書によって指摘され、自分たちが抱いていた Zen 認識との隔たりに、人びとは動揺したのです。

Zen に限らず、浄土真宗も戦争をサポートした歴史があることを知らないアメリカの信徒の方も少なくありません。「まさか浄土真宗が……」とショックを受ける方は案外多いです。人びとの心や価値観に携わる宗教は、アメリカだけに限らず、戦時に「心を動員する」役割を果たしてしまうことが少なくありません。やはり、こうした宗教が持つ危険性に普段から注意を向けておくことが重要だと思います。



アメリカ浄土真宗に学ぶ

Takashi Miyaji さんへのインタビュー

第3回 宗教と平和 (前半)

『宗報』(八月号)では、「アメリカ浄土真宗に学ぶ②——同性婚をめくって」をテーマにミヤジ・タカシさんにお話しいただきました。今回のテーマは「宗教と平和」(前半)です。戦後七一年目を迎えましたが、今なお世界では紛争が絶えることがありません。平和な世界の実現に浄土真宗はどのような役割を担えるのか。宗教が持つ価値を発信することの大切さを訴えるミヤジさんが、平和をめくって、アメリカで親鸞聖人の人間観を伝えることの重要性についてお話しください。

大統領の広島訪問

今年の五月にオバマ大統領が広島を訪問したことは記憶に新しいでしょう。その際に大統領は、

広島と長崎は核戦争の夜明けとしてではなく、道義的な目覚めの始まりとして知られるだろう

と語り、個人的な意見ですが、この「道義的な目覚め」が指す意味を理解するためには、アメリカにおける「宗教と平和」の問題について知っておく必要があると感じています。なぜなら、「道義的」と訳される moral は、往々にして宗教によってもたらされると考えられるからです。

宗教の戦争協力

というメッセージを發しました。この「道義的な目覚め」(moral awakening) をめぐっては、それが一体何を意味しているのか、理解できなかったという人は少

以前、ビクトリア・ブライアン (Victoria Brian) という仏教学者が、Zen At

アイデンティティの揺らぎ

ところで前回(『宗報』八月号)も触れましたが、日系人は昔も今も、「自分は一体何者か」というアイデンティティの揺らぎを抱えながら過ごしています。そのことは先の大戦の際も非常に顕著でした。アメリカでは外国人として扱われ、日本からは敵国のアメリカ人と見なされる。どこにいても不利な状況に置かれた。他国に派遣された多くのアメリカ

人兵士たちのなかで、日系人がまず危険な戦場に送られた歴史がそのことを物語っています。こうした状況のなかで、アイデンティティの揺らぎを常に持ち続けてきたのです。

国家によるアイデンティティ操作

重要な点は、「人種のサラダボール」などと表現されるように、多民族が共存するアメリカでは、今も日系人だけでなく、多くの人がアイデンティティの揺ら



Takashi Miyaji (宮地 崇)

一九八四年アメリカ・ユタ州生まれ。二〇〇六年、カリフォルニア大学バークレー校哲学科卒業。この間、慶應義塾大学へ一年間留学。二〇一一年、IBS (米国仏教大学院) 修士課程修了。二〇一三年から二〇一六年まで、龍谷大学大学院修士課程及び博士課程に在籍。現在、本願寺派総合研究所臨時職員、龍谷大学研究生の傍ら、浄土真宗聖典英語翻訳委員会で仏典翻訳などにも携わる。

ぎと葛藤しながら生きているということ
です。「アメリカの思春期」という言葉
がありますが、それはまさにアイデンテ
ィティが不確定な状況に悩む人びとの状
態を表わしています。「アメリカ人」と
いつても、その実態は本当に多様です。

だから国家が、国民に同じ方向を向か
せて国を動かそうとする時、「私たちは
一つなんだ」と意識させ、鼓舞する必要
があります。その場合にしばしば行われ
るのが、「共通の敵・仮想敵」を探すと
いうことです。共通の敵が見つければ、
自分たちは一つになれると考えるので
す。よく、宇宙人が攻めてきたら地球人
は争いをやめ、互いに協力し合うことが
できる、などという話が聞かれますが、
それに近い考え方だと思います。

アメリカが「共通の敵」を見つけた最
近の事例として、イラク戦争が挙げられ
るでしょう。

イラクでは、大量破壊兵器を理由に彼
らを「共通の敵」と見なし侵攻しまし
た。しかし、ついに大量破壊兵器は発見

されませんでした。犠牲だけが残った事
態に、アメリカ国民も次第に国家に対し
て疑念を抱くようになっていきます。自分
たちの正義が本当に正しかったのか、問
い始めています。いずれにしても、国家
を成立させるためにアイデンティティが
操作され、戦争に利用されるということ
が起っています。

多様性の確保と宗教の役割

私は、意図的に仮想敵を作って自己を
確立しようとしたり、統一的なアイデン
ティティを設定しようという態度に、そ
もその問題があると思います。無理な
「アメリカ人」像の押しつけは、結局、
そこに収まりきれない人びとを抑圧し、
排除された人びととの争いを生じさせる
のです。

国が「一つになろう」と動くとき、宗
教はそのリクエストに安易に従うのでは
なく、むしろ異なる価値を積極的に訴え
ることが重要です。アメリカの場合、保

守派はキリスト教思想を背景としていま
す。一神教的な価値観によって政治を動
かそうとします。そこにどの程度、多様
な価値観を訴えることができるのか。そ
こで、キリスト教以外の宗教が重要な役
割を担うのです。それはつまり、浄土真
宗を含む多様な宗教が、どの程度異なる
意見や視点を提示し、多様性を支えるこ
とができるのかが問われているというこ
とです。

「無明煩惱」という人間観

多様性を維持するためにも、アメリカ
で親鸞聖人の「無明煩惱」という人間
観をもっと訴えたいと私は思っています。
人間が根本的に「愚かさ」や「自己
中心性」を備えた存在だという認識や、
それを「慚愧」するという態度は、国や
宗教を超えて通用する考え方だと信じて
います。

残念なことに、アメリカでは法話など
で「愚かさ」や「自己中心性」、「慚愧」

といったテーマは避けられる傾向にあり
ました。なぜなら、法律に触れることも
していないのに、「愚かさ」と言われる
ことをアメリカ人は極端に嫌うからで
す。私も以前、ある開教使さんに「アメ
リカでは煩惱や慚愧の話はしないほうが
いい」とアドバイスされたことがあります。
しかし、本当にそれでいいのでしょ
うか。リクエストされないから真宗教義
の最も基本的な考え方に触れないという
姿勢には疑問を覚えます。リクエストさ
れない居心地の悪いような内容を、いか
に皆さんに聞いてもらえるか、そこが僧
侶の腕の見せ所だと思っております。

真宗のみ教えを通して、一人ひとりの
エゴを見つめ、内省的に考えて行動す
る、という態度がアメリカには非常に欠
けています。自己の限界・欲望を見据え
たところから他者を認め合うためには、
やはり親鸞聖人の人間観は重要です。大
統領が述べた「道義的な目覚め」につい
て、少なくともアメリカでは宗教が大き
な役割を果たしています。「絶対的に自

分が正しい」という正義を振りかざすア
メリカの風潮に異を唱え、浄土真宗のみ
教えを伝えつつ行動することで、平和な
世界、すなわち自他共に心豊かな世界が
実現される一歩となるのではないでしょ
うか。

次号でも引き続き、「宗教と平和」(後
半)をテーマに、アメリカ浄土真宗の具
体的な活動などについて、お話しした
く予定です。

(本願寺派総合研究所 教団総合研究室)